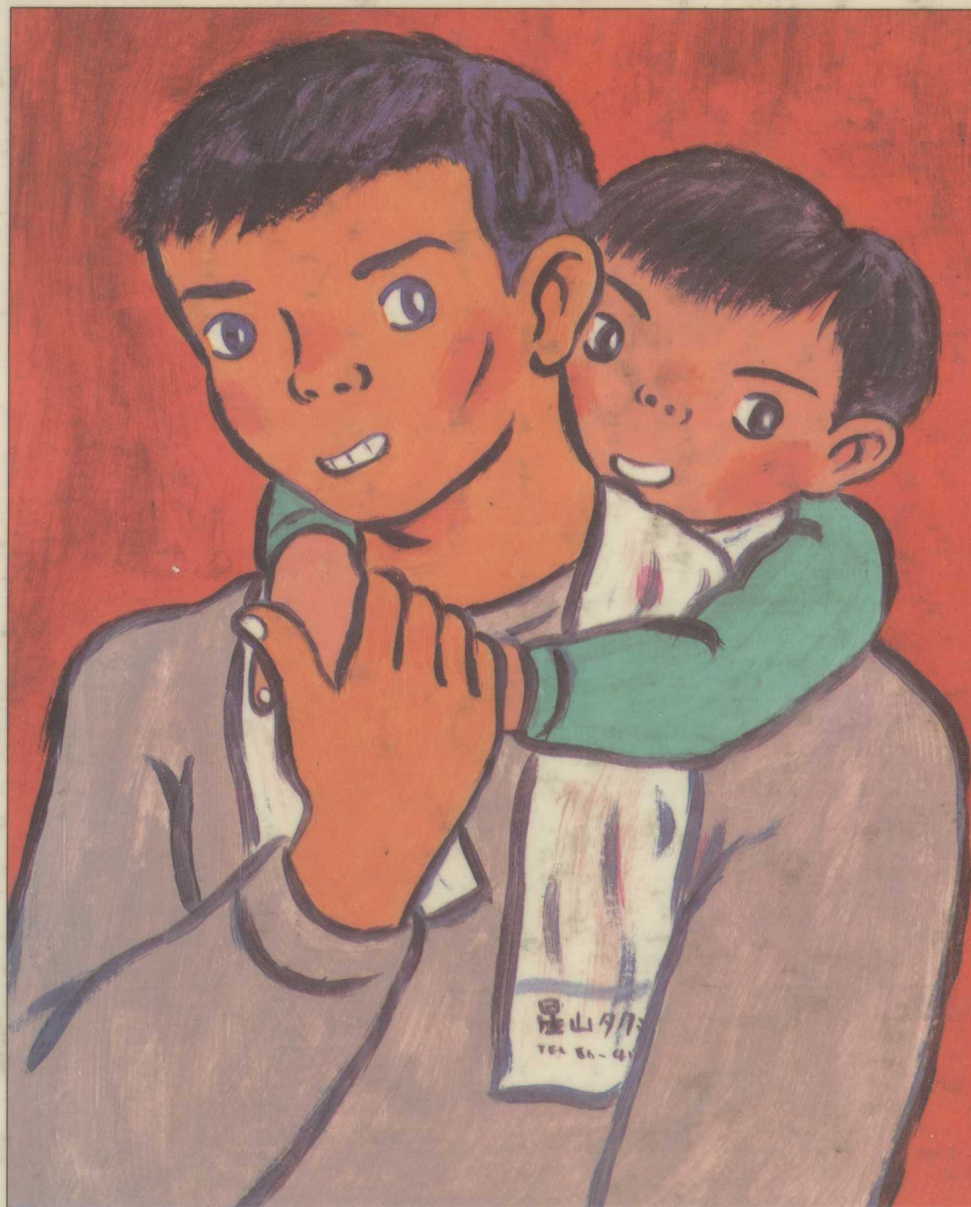


むかえに 行こう!

岩本敏男・さく ◆ 宮崎耕平・え



むかえに行こう！

岩本敏男

学校図書 1982 (昭和57年)

130p22cm (学図の新しい創作シリーズ)

学図の新しい創作シリーズ

むかえに行こう！

発行 1982年2月25日第1刷

著者 岩本敏男

画家 宮崎耕平

発行者 漆原利夫

発行所 学校図書株式会社

東京都品川区北品川1-11-14

電話 (03) 472-2741

振替 東京 8172415

〒140

印刷所 図書印刷株式会社

©Toshio Wamoto, 1982

8393-361657-1038

落し・乱し本はお取替えいたしません。

学図の新しい創作シリーズ

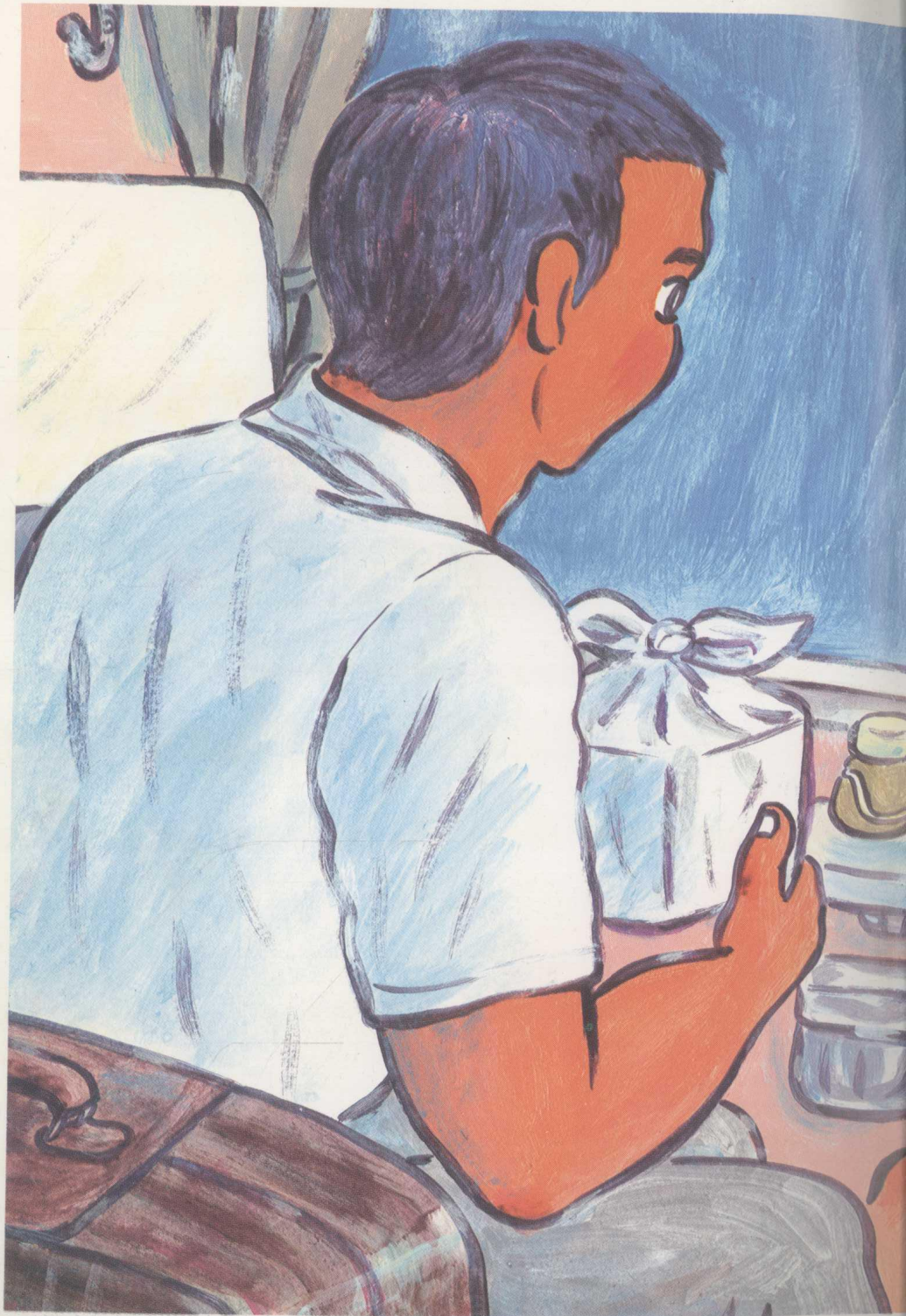
むかえに 行こう!

岩本敏男・さく◆宮崎耕平・え



お父さんは、ひざの上のスーツケースをあけた。白いきれでつつんだお骨こつの箱はこを出した。
「ほら、海やぞ。もうすぐやぞ。帰りたい、帰りたいというていたのにな……」(二二六ページ)





むかえに行こう！





1 希望荘へ

きぼうどう

9

2 となりのまり子さん

26

3 子どもはいらん

43

4 なお子ちゃん

57

5 くそおやじ

69

6 アカシヤの雨

83

7 みかさ町の家

95

8 なんとかする

111

この本を読んでくださったあなたに

128

1 希望^{きぼう}荘^{そう}へ

「行^いこうか……」

そういつて、お父^{ちち}さんは、上^う着^ぎのポ^ポケ^ケツ^ツトからタバコを出^でした。ねじれたタバコに火^ひをつけた。

「うん。」

せまいげんかんに立^たって、高^{たか}雄^おはもう一^{いっ}ど家^{いえ}の中^{なか}を見^みた。かべに、た^たすのあとがのこ^{のこ}っていた。柱^{はしら}に、さびたおし^{おし}ピン^{ピン}がのこ^{のこ}っていた。そして、もうだれもい^いなくなる。マ^マー^ーコ（妹^{いもうと}のま^まさ子^こ）だ^だって、お^おばあ^あちゃん（お母^{お母}さん）と行^いってしま^{しま}った。

「行くぞ。」

タバコをくわえたままで、お父さんがげんかんの戸をあけた。三月のおわりの日だった。外にはつめたい雨が降_ふっていた。

「おせわになりました。」

「そうですか、もう行かれますか。さびしいなりますわ。」

お父さんが、となりのおばさんとあいさつをした。

「おくさんのミシンをいただいたりして、ほんとにすみません。」

「いやあ。あんな古いものを……」

「高雄ちゃん。近くなんやから、遊_{あそ}びに來なさいよ。」

かさをさして、お父さんのあとからついていった。設計事務_{せつけいむしょ}所のかどをまがって、表通_{おもてどお}りに出た。風がきつかった。かさがゆれて、高雄_{たかお}は鼻_{はな}をすすった。

「おまえ。さむいのとちがうか？」



「うん。」

お父さんが立ち止まった。みぞにタバコをすてた。ふたりでならんで歩いた。かさをかたむけて、風にむかっていくように歩いた。

バス停まで来て、パン屋さんのテントの下へはいった。いつもはパンのにおいがするのに、雨のにおいがした。野球帽をかぶりなおして、高雄はまだ鼻をすすった。茶色のスーツケースをかかえて、お父さんはだまっていた。

バス停の青いベンチのそばに、女の人が立っていた。かさをさして、もう一本かさをもっていた。だれのかさやろ？ 高雄はもう一本のかさを見ていた。

お母さん、いうてたな。そうや、いうてたわ。お父さんとはじめて会ったのは、雨の日の晩やっただて……。

そうなんよ。洋裁をならいに行った帰りに、かさをかしてもろうたん。

きゆうに降りだして、どこかのお店のき下に立ってたら、いきなりかさを
出さはったの。黒い皮のジャンパーを着てはって、やくざ屋さんかと思
うたわ。あとでわかったことやけど、中華のお店で腹ごしらえをして、出
てきやはったとこやったの。ぼろがさやが、もっていき。それだけいうて、
さっさと行ってしまうはったんよ。近くに止めてあつたトラックで、行っ
てしまわはったの。その人が、いまのお父さん……。

「おい、バスが来たぞ。」

お父さんの声がして、高雄はテントの下をとび出した。

バスの中も雨のにおいがした。つり皮にお父さんがつかまって、お父さ
んの腰に高雄がつかまった。

その人が、いまのお父さん……。ところが、かさをひろげてびつくりやつたわ。ぼろがきもぼろがき。あなはあいてるし、骨は三本もおれてるしね。お母さん、そんなかさをさして、笑いながら帰ったんよ。お友だちと、いっしよにかりてたアパートまで。田舎から出てきておつとめをはじめて、あのときほど笑うたことないわ。どうして、あんなに笑うたのか、いまでもわからないの。

それから、ぼろがきでもかえさないかんと思うてね。洋裁の日の帰りに、あの場所でまつことにしたの。いつも三十分ぐらいはまったかな。けど、一月しても二月しても、黒の皮ジャンパーはあらわれなんだん。そうなたら、女の意地やわ。まちつづけたんよ。そして、三月め。やっと会えたときには、お母さん、泣いてしもうたわ。どうして、泣いたのかっていわれても、それもようわからないの。

二年して、結婚したん。お父さんは、三十歳。お母さんは、もう二十七

歳さいになつてたわ。そうして、また二年して、高雄たかおが生まれたんよ。

がくんとバスがゆれて止まった。よろけて、高雄たかおはお父さんにしがみついた。

「おっと。」

肩かたを、大きなお父さんの手がささえてくれた。

つぎのバス停ていでおりた。バスを見おくってから、お父さんはかさをさした。バスと反対はんたいの方向へすしだけでもどった。

「すぐそこやからな。」

「うん。」

左へまがった。同じかたちの家がつづいていた。

レコード屋やさんがあつた。本屋ほんやさんがあつた。のぼりを立てた酒屋さかやさんもあつた。コインランドリーも喫茶店きっさてんもあつた。あき地もあつた。みんな